

スキー指導における言葉がけの検討 ～ MZ 白石スノースポーツスクールインストラクターを対象に～

飯沼 勇樹 関岡 康雄 川口 鉄二

キーワード：言葉がけ、直接的指導行動、相互作用行動

A Study on Verbal Instructions for Skiing ～ Focused on the Instructors at MZ Shiroishi Snow Sports School Instructors ～

Yuki Iinuma. Yasuo Sekioka. Tetsuji Kawaguchi.

Abstract

The purpose of this study was to clarify the realities and problems in verbal instructions in skiing at MZ Shiroishi Snow Sports School, by examining the verbal instructions on skiing.

We conducted a study on the response of verbal instructions for members of the school. We also analyzed the results by performing experimental study of the verbal instructions.

As a result, we found many problems in verbal communications, according to the response of the school members and the instructors' situations. It was concluded that there was a need to improve such problems before we examine the verbal instructions.

Key words : verbal instructions, directional instructions, reciprocal action activities

I. はじめに

1. スポーツの指導方法

スポーツ指導において、指導者は様々な方法を用いて学習者に対して指導を行っている。松井（1981、p854）らは、「指導者自身が動作をやってみせる方法、視聴覚機器を使用する方法、手とり、足とりの方法など様々なものがある。具体的に①示範による指導、②言葉による指

導、③視聴覚機器による指導、④反応強制による指導、⑤集中法と分散法による指導、⑥全習法と分習法による指導」の6つに大別し紹介している。

また「ものを人に教えるということは、行き当たりばつたりのものではなく、学習効果をあげるためには教え方すなわち、指導法を研究する必要がある」と述べている。このことから、スポーツの指導者は、技術の指導方法を

多角的に検証し、「正確にわかりやすく指導」するために研究していくことが重要であろう。

2. 言葉がけによる指導とその研究の重要性

スポーツ指導における言葉の重要性について、K. マイネル (1981) は、「人間は言語の助けによって自分自身の運動経験を、また前の世代の運動経験をも保存しているとともに、言語は単に修正者の機能を持っているだけでなく、スポーツの諸技能を新しく身につけるのに要する時間をどんどん短縮している」と指摘している。また、言葉による指導について、松井 (1989、p854) らは「言葉を発することは簡便であるので、適宜、タイミングよい指導をするのに欠かせない手段である」と述べている。これらのことから、スポーツの指導において言葉が果たす役割は大きく、指導に不可欠なものであることが言える。

また、松田 (1985、p444) らは、スポーツ指導の場面での言葉が果たす役割について、練習前の言語による事前訓練、練習の途中、または、練習後におけるフィードバック (結果の知識) の2つに大別し、「指導者のフィードバック (結果の知識) が学習者に具体的な目標を与え、それが学習への動機づけになるだけでなく、指導者の言語教示は学習者の関心のバロメーターとしても受け止められることを認識すべきである」と学習者の学習への影響について述べている。これらの役割からは、それぞれどのような言葉が、言葉がけされるかによって、学習者の学習の進み具合も変化すると予測できる。

これらのことから、スポーツ指導の場面で、言葉がけが、どのようになされていたのか、その質や量を検討することや学習者にどのような影響を及ぼすのかについての研究は、学習者の学習過程を能率的・効果的に進められる、支援の鍵になるものと考えられる。

3. スキーの指導方法と言葉による指導の重要性

スキー指導の観点からも、その指導方法、言葉がけの研究の重要性については同様のことが言える。

スキー指導においては、他スポーツと違い斜面、雪質、天候、用具など学習者以外の外的環境の影響が多く、それらを念頭に置きつつ指導を行わなければならない。このことから、スキー指導者は、これらの指導方法を指導環境に合わせて用いることが重要である。

また、スキー指導時は、1ターンするとすぐ反対方向を向いてしまうこと、他のスポーツよりも移動距離が長く、スピードが速いので一つの動きを止めて説明することが非常に難しいこと、外的環境が指導の善し悪しを大きく左右することなどの特徴があり、これらを、配慮しつつ指導者の言葉による指導を検討することは、スキー指導全体が改善され、学習者へ「正確でわかりやすい」指導実践のための鍵になると予測される。

4. 問題の所在

本研究においては、日本のスキー指導団体の一つである、(社) 日本職業スキー教師協会 (SIA) 公認のNPO 法人不忘アザレア、宮城県白石スキー場に常設する MZ 白石スノースポーツスクールの問題を取り上げ、研究を進めることとした。スクールの主な概要としては、常勤教師 5 名、非常勤教師 10 名で、福島県、山形県と地元以外の受講生も多く見られるスクールである。

当スクールにおいては、スキー指導のノウハウが記された「SIA オフィシャルメソッド」いわゆる指導マニュアル (教程) を基盤にスキー指導を組み立てている。また、近年のスキー技術・用具の変化を的確に捕らえ指導研修・練習を行い技術的・用具的な側面での効果的な指導の技術・知識は得られてきた。

しかし、スクール会員生からは、「説明がわかりにくい」、「どうしたらいいのかわからない」、「なかなかうまくならない」等の声が聞かれ、学習者が思うように上達しないという現状が未だある。

そのため早急に原因を解決し“能率的・効果的な指導方法”の提案・構築をしなければならない。

原因として新しい技術が知覚・理解されていたとしても、それをどのように学習者に伝えていくかについて検討がなされていない事が考えられる。

当スクールでは、技術的な理解に対する研修・練習はあっても学習者へどのように伝えるかの検討は十分にされておらず伝え方に対する研修・練習もなされていない。特に、言葉がけ指導による方法は、最初に検討なされなければいけない重要事項であろう。

本研究では、効果的なスキー指導の提案・構築のため「言葉がけによる指導」に焦点をあて、MZ 白石スノースポーツスクールの指導時の言語教示を検討することとした。

II. 研究目的

本研究では、スキー指導時に指導者が発言する、言葉がけの内容・回数に関して検討を加え、MZ 白石スノースポーツスクールの指導における言葉がけ指導に関する様々な問題点を明らかにし、より望ましい指導のための知見を得る事を目的とする。

III. 研究の枠組み

学習者が当スクールの言葉がけに対しどのような意見・感想を持っているか研究 1「言葉がけに対する反応に関する調査」を行った。

また、実際に当スクールの 3 名の指導者における指導時の言葉がけの実態を、研究 2「言葉がけに関する実験」を行い結果を分析した。

IV. 研究1「言葉がけに対する反応に関する調査」

1. 研究方法

1) 調査対象

MZ白石スノースポーツスクール受講生である、2004年～2005年度スクールシーズン会員27名を対象とした。プロフィールは以下の表1の通りである。

表1 対象者のプロフィール

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
対象者の人数	1	3	4	6	6	7	27

2) 調査方法

27名に対し質問紙調査法を用いて「言葉がけに対する満足度」のアンケート調査を行った。さらに、調査用紙の余白部分に、「当スクールの言葉がけ指導に関する意見」を自由記述方式で調査した。

尚、調査用紙は研者が配布し、調査の回収総数は27名で、有効回答数は27名であった。

3) 調査内容

「言葉がけに対する満足度」に関する9項目について調査した。また質問項目については、「現在の指導について」、「言葉がけの仕方について」、「言葉がけの内容について」主要な内容を取り上げた。

4) 調査期間

平成16年3月16日から平成16年3月20日

2. 結果及び考察

1) 調査結果について

①現在のスキー指導について

「現在のスキー指導には満足か」の質問に対しての結果は以下の表2-1の通りだった。

表2-1 現在のスキー指導についての調査結果

とても満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	とても不満
14 (52%)	8 (30%)	2 (7%)	1 (4%)	2 (7%)

これらのことから、「とても満足」、「やや満足」が全体の8割をしめ、満足している者が多い結果となった。しかし、残り2割のものは「どちらでもない」か何らかの不満を持っている。その2割について詳細を検討しなければならない。

②言葉がけの仕方についての質問項目

「言葉がけの仕方について」の調査結果は以下の表2-2の通りだった。

表2-2 言葉がけの仕方についての調査結果

	とても満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	とても不満
全体的な言葉がけの声の大きさ	14 (52%)	7 (26%)	6 (22%)	0 (0%)	0 (0%)
全体的な言葉がけのタイミング	8 (30%)	6 (22%)	13 (48%)	0 (0%)	0 (0%)
全体的な言葉がけの回数	6 (22%)	10 (37%)	9 (33%)	2 (7%)	1 (0%)

「全体的な言葉がけの声の大きさ」、「全体的な言葉がけのタイミング」の質問に対しての結果は、両調査項目ともやや不満、とても不満の回答は見られなかった。この結果から、両項目とも満足のものであった事が考えられる結果となった。しかし、タイミングについては、どちらでもないが約半数を占めていることから質問内容をイメージしにくかったことが考えられる。「全体的な言葉がけの回数」の質問に対しての結果は、満足の割合が半数を占め、不満に感じている者も見受けられる結果となった。

③言葉がけの内容についての調査結果

言葉がけの内容についての調査結果は以下の表2-3の通りだった。

表2-3 言葉がけの内容についての質問項目

	とても満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	とても不満
全体的なアドバイスの内容は	8 (30%)	7 (26%)	6 (22%)	5 (19%)	1 (4%)
滑走前のアドバイスや指示は	8 (30%)	12 (40%)	6 (22%)	1 (4%)	0 (0%)
滑走時のアドバイスや指示は	5 (19%)	10 (37%)	8 (30%)	3 (11%)	1 (4%)
滑走後のアドバイスや指示は	4 (15%)	9 (33%)	9 (33%)	4 (15%)	1 (4%)
上手くできない滑りに対するアドバイスは	7 (26%)	6 (22%)	7 (26%)	7 (26%)	0 (0%)

「滑走前のアドバイスや指示」についての項目が比較的満足度が高い以外は、全体的に不満の意見が多く見受けられるそれ以外では、声の大きさやタイミング、回数の項目に比べ、満足度が低い結果となった。

尚、年齢別に対象者を分け、各項目の調査結果を見たところ、現在のスキー指導に対して、30代、やや不満が1名、60代、とても不満が2名見られ、話し方については、言葉がけの回数について、とても不満が30代1名、やや不満が60代に1名見られる結果となった。また、言葉がけの内容については、各項目とも、中高年(40代、50代、60代)に意見が集中しており、全体的には、中高年に不満の意見が集中する結果であった。

⑤言葉がけに対する意見(自由記述内容)について

表3 自由記述の意見内容

意見内容	(件数)
・滑走時・滑走後など個人的なアドバイスがほしい	3
・アドバイス通りに滑れない	2
・指導の声が聞き取れない	2
・どうしてもよいと判断される	1
・説明が難解	1

学習者の言葉がけに対する意見について表3の通りである、「滑走時、後など個人的なアドバイスがほしい」が3件、で一番多く、以下の4つが続く結果となった。

2) まとめ

今回の調査では、言葉がけに対する学習者の反応として、「言葉がけの仕方」については、言葉がけの回数について、「言葉がけの内容」については、滑走時・後の言葉がけ、上手くできない滑りに対する言葉がけについて不満を持っていることがわかった。

V. 研究2「言葉がけに関する実験」

1. 研究方法

1) 実験方法および被験者

MZ白石スノースポーツスクールスキーインストラクター5名を被験者とし、指導時の指導者の言葉がけの内容を明らかにする目的で実験を行なった。対象インストラクターの特性、実験の構成は次の表4、5に示した。

表4 被験者の特性1
(指導の得意・不得意)

	直滑降	ブルークボーン	シュテムターン
A	得意	不得意	不得意
B	不得意	得意	不得意
C	不得意	得意	得意

表5 指導実験の構成員

	TEST1	TEST2	TEST3
指導者	A	B	C
	B	A	A
学習者	C	C	B
	D		
観察者	E		

尚、表5のような指導実験を1回の実験とし、それぞれ指導する滑り方を1回事に変更し3度行なわせ、延べ9つのTESTから指導者の言葉がけを集録し分析した。尚、指導する滑り方については、被験者が年間で多く指導する、直滑降、ブルークボーン、シュテムターンを選んだ。集録方法としては、指導の様子を、観察者がVTRに収録し、ボイスレコーダーで言葉がけを収録、指導終了直後に学習者に言葉がけについての意見・感想をインタビュー形式で質問し、ボイスレコーダーで集録し分析した。

尚、本実験では、当スクールの指導者の言葉がけの実態を明らかにする目的のため、一般の受講生を被験者とせず指導者同士の教え合いとした。

2) 実験期間

実験期間は、2005年3月7日から3月16日

3) 実験場所及び設定条件

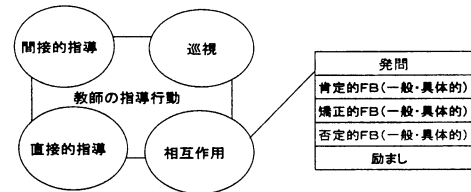
宮城県の不覚アザレア宮城蔵王白石スキー場にて実験を行った。尚、設定条件は以下の表6に示した。

表6 実験の設定条件

指導時間	30分
天候	晴れ
バーン状況	踏み固められた緩斜面
斜度	平均14度
滑走距離	600メートル

4) 分析方法

スキー指導と体育授業において行う教師の指導行動には、共通性が見られると考えられることから、高橋らの体育授業研究の理論を援用した。



* FBはフィードバックの略

図1 教師の指導行動と相互作用行動のカテゴリー

高橋らの理論は、言語内容から、図の4つの教師の指導行動に分類し、その中の相互作用行動が授業の成果と関わる重要な事項としてさらに8つにカテゴライズし分析している。(図1)

尚、これまでの研究成果から次のようなことが言われている。

①教師の指導行動について

- ・マネジメント(間接的指導行動)や直接的指導行動の時間量や出現頻度は学習者の授業評価とマイナスに関係する。(高橋、1994、p242)
- ・学習成果にもっとも強く影響するのは相互作用の量と質である(高橋、1988、p76-80)
- ・授業評価の高い授業では、間接的指導行動、直接的指導行動の時間が少なく、相互作用行動が多い傾向が見られる。(高橋、岡沢、1992、p26)

②相互作用行動について

- ・個々人の学習活動に対する「肯定的FB(賞賛)」、「矯正FB(助言)」、励ましは学習者の学習成果と深く関係する、また、具体的な肯定的、矯正FBは、一般的FBよりも具体的FBの方が一層有効である。(高橋、1994、p242、243)
- ・肯定的FBや励ましが生徒による授業評価と正の相関があり、否定的FBは負の相関がある。また「雰囲気の良い授業」について、授業中の教師の相互作用(発問)が頻繁である。(高橋、岡沢、1989、p199)

体育授業であっても、同じ運動を指導するという面でスキー指導と重なる部分があるため、これらの、

研究成果や理論を参考に言葉がけを分析した。

2. 結果及び考察

1) 教師行動と言葉がけの回数 (全体)

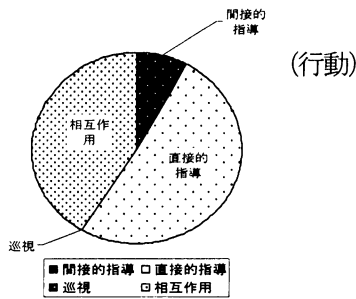


図2 実験における教師行動の言葉がけ回数 (全体)

本実験においては、被験者3名の指導行動は、直接的指導行動768回/1487回(51%)と相互作用行動621回/1487回(41%)合わせて9割を示しており、直接的指導行動が相互作用行動を上回る結果となった。尚、間接的指導行動の割合が極端に少ない原因としては、本実験において指導中の、リフト乗降、整列、斜面移動等の場面を集録しなかったことが原因として考えられる。巡視行動については、言葉がけについての検討であるので、0/1487回となった。(図2)

直接的指導行動は、指導者から学習者へ行う指示であるが、直接的指導行動が多い場合は、一方通行的な指導に偏ってしまうということも考えられる。

これらのことから、3名は、一方通行的な言葉がけが、学習者との関わり合いのある言葉がけを上回る結果となった。尚、直接的指導行動と相互作用行動がスキー指導においても指導の成果に関わる重要な二つの行動であることから、細分化し問題点を探った。

2) 直接的指導行動が多い原因

(1) 言葉がけの回数から見る教師行動 (被験者別)

被験者別の直接的指導行動と相互作用行動の言葉がけの回数を図3-1~3-3に示した。

①被験者Aについて

図3-1を見ると、直滑降では、相互作用行動35回/69回、直接的指導行動33回/69回とわずかに相互作用行動の言葉がけの回数が上回っているが、ブルークボーゲン(直接的指導行動87回/159回、相互作用行動53回/159回)、シュテムターン(直接的指導行動180回/357回、相互作用行動150回/357回)では逆の結果を示した。

②被験者Bについて

図3-2を見ると、直滑降では、相互作用行動18回/49回、直接的指導行動29回/49回、シュテムター

ンは直接的指導行動が89回/380回、相互作用行動が53回/154回と直接的指導行動が相互作用行動の言葉がけの回数を上回る結果となった。ブルークボーゲンにおいては、直接的指導行動83回/176回、相互作用行動83回/176回、と相互作用行動と直接的指導行動の言葉がけの回数が一致する結果となった。

③被験者Cについて

図3-3を見ると直滑降では、直接的指導行動が52回/91回、相互作用行動が36回/91回と直接的指導行動が相互作用行動の言葉がけの回数を上回る結果となった。逆にブルークボーゲンでは、直接的指導行動が96回/206回、相互作用行動が104回/206回と相互作用行動が直接的指導行動の言葉がけの回数を上回り、同じくシュテムターンでも、直接的指導行動が49回/155回、相互作用行動が89回/155回とブルークボーゲン同じ結果であった。

(回数)

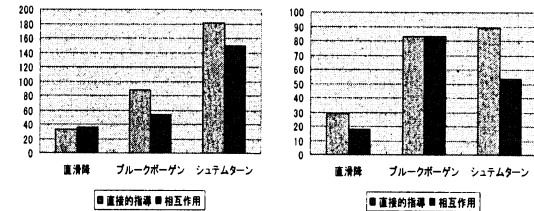


図3-1 被験者A、滑り方別

図3-2 被験者B、滑り方別

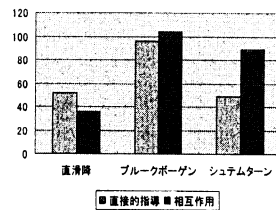


図3-3 被験者C、滑り方別

④3名の被験者の比較

3名に共通して言えることは、得意種目の場合は、直接的指導行動よりも相互作用行動の言葉がけの回数が高くなり、苦手種目では、相互作用行動よりも直接的指導行動の言葉がけの回数が高くなる結果が見られたことである。よって、実験において直接的指導行動の言葉がけの回数が相互作用行動の言葉がけの回数を上回る原因として、指導者が指導する滑り方への苦手意識を持っていたことが考えられる。

(2) 言葉がけの回数から見る教師行動 (滑り方別)

①3つの滑り方を比較

滑り方別に言葉がけの回数と割合から、直接的指導行動が多い原因を探ったが、滑り方に関係なく直接的指導行動と相互作用行動の言葉がけの回数と割合が、指導の

大半を占め、全ての滑り方において、直接的指導行動の言葉がけの回数と割合が、相互作用行動の言葉がけの回数を上回る結果となった。

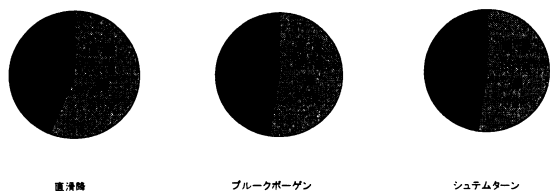


図5 直接的指導と相互作用行動の言葉がけの回数と割合 (滑り方別)

3) 相互作用行動を増やすことについて

(1) 相互作用行動の言葉がけ (全体)

表7は、実験における「相互作用行動」の3名の被験者の言葉がけ全回数621回中のその言質からカテゴリー別の言葉がけの回数と割合を示したものである。結果、肯定的・矯正のFBの一般的な言葉がけが8割を占め、発問、否定的FBと励ましについては、言葉がけが少ない結果となった。

本実験では、矯正の、肯定的FBでも、一般的なものが多かった。このことから、肯定・矯正のFBをスキー指導時の場面事に回数を分け具体的なFBが少ない原因を探った。また、発問、励ましについても少ない原因、できない原因を探った。

表7 相互作用行動のカテゴリー別の言葉がけの回数

カテゴリー		言葉がけ回数
発問		17 (2.7%)
フィードバック	肯定的	一般的 127 (20.5%)
		具体的 18 (2.8%)
	矯正	一般的 358 (57.3%)
		具体的 96 (15.5%)
	否定的	一般的 1 (0.2%)
		具体的 2 (0.3%)
励まし		8 (1.0%)
相互作用行動		621 (100.0%)

(2) 具体的肯定的・矯正のFB、励ましが少ない原因

①スキー指導の場面と矯正の・肯定的FB

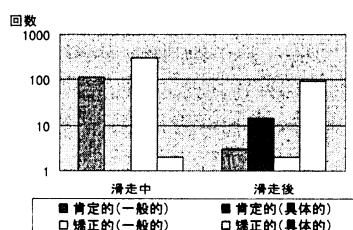


図6 矯正の・肯定的フィードバックの言葉がけ回数 (滑走中・滑走后)

スキー指導の場面事、肯定的・矯正のFBを見てみた

ところ、学習者が滑走前、指導者が示範中、学習者が滑走中、学習者の滑走後の4つの場面毎に細分化し回数を見たところ、滑走中と滑走後の場面においてこのFBが集中していることが明らかになったため、さらにその結果を分析した

図6を見ると、滑走中には、肯定的・矯正のFBともに一般的なものが圧倒的に多く(矯正の一般110回/111回、具体1回/111回、肯定的一般302回/304回、具体2回/304回)、滑走後には、肯定的・矯正のFBともに具体的なものが圧倒的に多い結果となった。

(肯定的一般3回/17回、具体14回/17回、矯正の一般2回/95回、具体93回/95回)

しかし、滑走後を被験者別に見てみるとかなりの偏りが見られた。肯定的FBの具体的は、12回/15回が被験者Cの直滑降の指導によるもので、矯正のFBの具体的は、被験者Aのシュテムターンによるものが半数を占めていた。滑走後の肯定的・矯正のFBがほとんどされていないケースが多かったということだ。これらのことから滑走時、後の具体的な両FBを増やすことについて問題があると考えられる。

②励ましができない原因

本実験では、励ましの言葉がけが少ない結果であった。指導者が学習者の運動を観察し、どこがよいか、どこが悪いかが明確に判断できる能力を持ち合わせていたら、学習者が運動技能の改善や向上が見られたとき見逃さずに、励ましの言葉がけを与えることが可能ではないだろうか。(M. モウアー、1995、p185) このことから、3名の指導者が指導する運動に対して正しい知識を十分に持ち合わせていなかったことで励ましが与えることができず、少なくなったと考えられる。

しかし、今回の実験では、指導者の運動知識に関して事前に調査を行っていないため、今後、3名の指導者の運動知識について把握する調査を行うことで、明確な原因として挙げられるだろう。

(3) 発問の言葉がけが少ない原因

本実験において発問の言葉がけの回数が少なかった。原因として、直接的指導行動などの指導者の一斉指導的な行動が多かった事が考えられる。発問することによって指導者の一方通行的指導(直接的指導)が少なくなり、学習者との関わり(相互作用行動)が増えることも考えられるだろう。(勝田、2002) 今後、発問の言葉がけの回数を多くし学習者が主体的に問題解決できるよう発問によって意思の疎通を図ることが必要であろう。

4) インタビューでの意見について

インタビューでの意見を4項目にまとめ、3名の言葉がけの実態を探った。

(1) 学習者の意見件数と意見内容

①言葉がけの声の大きさについての意見

「言葉がけの声の大きさについて」の意見は表の通りである。

表 8-1 声の大きさについての意見内容

意見分類	適切	どちらでもない	不適切
言葉がけの声の大きさについて	8	0	6
意見内容のまとめ	声が大きくよかった 風が強いので聞き取れなかった 状況におおじた声の大きさが必要 距離が出てくるので言葉がけが聞き取れない		

このことから、不適切であった意見内容から指導状況（特に学習者の滑走中）、指導環境（特に吹雪時）を考慮した言葉がけの声の大きさについて問題があると考えられる。

②言葉がけのスピードについて

「言葉がけのスピードについて」の意見は表の通りである。

表 8-2 言葉がけのスピードについての意見内容

意見分類	適切	どちらでもない	不適切
言葉がけのスピードについて	0	0	2
意見内容のまとめ	言葉がけのテンポが速すぎる		

言葉がけのテンポが速いということは、学習者が学習内容を十分に理解できない事が考えられる。説明、指示が一方的、一斉指導になりがちな傾向が見られる。言葉がけのテンポが速い場合には、相互作用が少なくなる危険性が生じるので、指導者は学習者主体の指導を心がけるべきだろう。

③言葉がけのタイミングについての意見

「言葉がけのタイミング」についての意見内容は表の通りだった。

表 8-3 言葉がけのタイミングについての意見内容

意見分類	適切	どちらでもない	不適切
言葉がけのタイミングについて	4	0	0
意見内容のまとめ	滑走中の言葉がけのタイミングが良かった イチニニーイチニニーと受講生の滑走リズムに合わせた言葉がけが良かった		

滑走中の言葉がけのタイミングが良いということは、学習者が滑走する動作を指導者が感覚上で一緒になって体験し、その動きを行っているときの感じを感じ取る事によって、言葉がけが学習者にタイミング良く伝わったことが考えられる。

④言葉がけの回数についての意見

表 8-4 言葉がけの回数についての意見内容

意見分類	適切	どちらでもない	不適切
言葉がけの回数について	0	0	3
意見内容のまとめ	示範時の言葉がけが少なかった 滑走中の言葉がけが多い		

言葉がけの回数については、適切な意見が見られなかったことから、実験指導時の言葉がけの回数については不適切であった事が考えられる。このことから、示範時と学習者が滑走中の言葉がけの回数について問題があると言えるだろう。

VI. 結論

本研究において、スクール会員対象に行った調査での意見と、実際のインストラクターを対象として行った実験的調査において見いだされた言葉がけ指導の実態は、今後、指導時の言葉がけを改善していくべき重要な課題点につながる。本研究において明らかにされた問題点は次の通りである。

① 言葉がけの回数

言葉がけの回数については、スクール会員対象の調査で不満という反応が見られた。実際の3名のインストラクターは、示範時の言葉がけが少なすぎて動きを理解できない、滑走中の言葉がけが多すぎて学習者が混乱するなどの場合が見受けられた。

② 滑走時・滑走後の言葉がけ

滑走時・後の言葉がけについては、スクール会員対象の調査で不満である、個人的にアドバイスしてほしいという反応が見られた。実際の3名のインストラクターは、滑走後には具体的FBはみられたものの指導者によって偏りが大きい結果で、具体的なアドバイスは、滑走時・滑走後ともにほとんどされていないケースがあった。

③ 上手くならない滑りに対する言葉がけ

スクール会員対象の調査では、滑れない滑りに対する言葉がけについて不満であるという反応が見られた。実際の3名のインストラクターの指導では、学習者と指導者の意志の疎通が十分ではなく、一方的な言葉がけが多かったと考えられ、個人が持っている学習上のつまずきの改善など、必要としている言葉がけができていない可能性があった。

尚、この3点の問題点の他にも、言葉がけの仕方については、3名の指導者の実態から、声の大きさ、スピードについて問題が見られた。

本研究においては、スキー指導の言葉がけについて、MZ 白石スノースポーツスクール指導者又は学習者を対象とし検討したが、限定された設定条件ではあったものの、3名の指導者は、言葉がけの伝え方に多くの課題点

が見受けられる結果となった。言葉がけの内容を検討する前に、これらを改善することが求められる。

これらのことから、MZ 白石スノースポーツスクールでは、技術的な指導研修は行われているが、今後、教え方、伝え方の研修を行い、指導者の資質の向上、指導技術の向上を計り、本研究での課題を改善していくことが求められる。

Ⅶ. 引用・参考文献

- 深見英一郎、(2004) 近年の米国に見る体育教師の効果的フィードバックに関する研究の動向。体育学研究 49
- 平井敏幸、鍋谷照、須田和也、丹波哲次、柳川郁生財部重孝 (1995) スキー指導における身体部位の指示に関する調査。日本体育学会大会号 49 : 607
- 平沢文雄 (2005) 日本人のスキー革命、スキージャーナル株式会社。p 120 - 121
- 金子和正 (1993) スキー用語に関する研究-用語の分類を中心として-。日本スキー学会誌、3-1 : 147-159
- 松井秀治、星川保、天野義裕 (1995) C級スポーツ指導員教本スポーツ指導論。(財)日本体育協会、
- 松田岩男 (1979) 運動技能の指導と言語
教示や示範。体育の科学
- K・マイネル、金子明友訳 (1981) スポーツ運動学、大修館書店。p122-372
- Mawer, M. (1995) The effective teaching of Physical education. Addison Wesley Longman : New York. p188
- 関岡康雄編著 (2004) コーチと教師のためのスポーツ論、道和書院
- 高橋健夫ほか訳 (1988) シーアレントップ～体育の教授技術～、大修館書店
- 高橋健夫編著 (2003) 体育授業を観察評価する教師のためのオーセンティックアセスメント。明和出版
- 高橋健夫著 (1989) 新しい体育の授業研究、大修館書店
- 高橋健夫、岡沢祥訓ほか (1989) 教師の相互作用行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について、体育学研究 34-3
- 高橋健夫、岡沢祥訓、中井隆二、芳本真 (1992) 体育授業における教師行動に関する研究。体育学研究 36-3
- 高橋健夫著 (1994) 体育の授業を創る。大修館書店
- 全日本スキー連盟 (2005) 日本スキー教程〔技術と指導〕第4刷。スキージャーナル株式会社
- 勝田隆 (2002) 知的コーチングの進め～頂点をめざす競技者育成の鍵～。大修館書店。p80-81
- 日本職業スキー教師協会 (2003) The Ski Book SIA オフィシャルメソッド。山と溪谷社